



TITLE:

図書業務放談

AUTHOR(S):

保田, 清

---

CITATION:

保田, 清. 図書業務放談. 静脩 1970, 7(2): 1-2

ISSUE DATE:

1970-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36590>

RIGHT:

## 図 書 業 務 放 談

保 田 清

本学を卒業して以来35年目になるが、その間ほとんど本学の文献だけで研究・教育に従事して来た私には、本学の図書業務について種々の希望があるが、その中で図書購入に要する日時を何とか短縮出来ないものかと深刻に考えている。殊に教養部に移って、教室の図書購入に直接携わってからは、一層その必要を如実に痛感した。具体的なデータもない事はないが、それを挙げることは差し控えて、とにかく少々の会計法規違反を犯したとしても追いつけそうもない位である。

勿論これは洋書を主としての話だが、和書とても楽観はできないようだ。例えば学生諸君の購入希望書も、近刊書の場合は大抵購入手続中のものであることが多い。尤も学生用にせよ研究用にせよ、国民の税金で賄われ、大学の蔵書として孫子の代まで残るものなのだから、本学の教育・研究の責任者である教官が、購入すべき図書か否かを慎重に考慮すべきで、従ってその決定に多少の日時を要するだろうが、問題はその後、利用できる状態になる迄の日数——いや月数？——である。

戦前のノンビリ・ムードや戦中の麻痺時代や戦後の混乱期はさて置いて、図書の登録・支払、目録・分類、カード挿入など、重要な基礎的作業を果たすのに時間がかかるのは当然だが、そこに工夫の余地が果してないだろうか。例えば目録と分類とを同じ人がすれば、その図書の内容を考えるのに二度手間にならない筈である。一体、わが国のライブラリアンの大きな欠点は、極めて少数の人を除いて、図書の内容について知らなさ過ぎる事ではなかろうか。嘗てカントの邦訳をどの項目に分類すべきかと一司書から相談を受けた事がある。彼が持参した分類表を見ると、「先驗哲学」という項目があるではないか。その彼も今では或掛長になっている。

そこで私は目録・分類をすべて夫々の部局で行ない、その研究室の援助を願って、司書能力を向上させねばなるまいと思う。これは何年もかけないと有効でないから、速かに始めるべきである。こうしてレベル・アップするなら、附属図書館は目録に費す労も省け、保存と総合との機能に専心出来るだろう。尤も全学的な意義がありかつ高価な図書だけは、その申出を受けて選択・決定する全学的な教官の組織を制度化した上で、この購入・目録・分類を直接行なわねばならない。

どうも図書館学の講習をいくら受けても、現場での教育がなければ、大学図書館員として有能な人材は得られないようだ。購入・目録分類・出納など何れの仕事をするにしても、こ

のような教育を受けて図書の内容が多少とも分る人が当るようになる迄は、必要な文献を教官自身が書架から取り出すのでないと、研究・教育の能率低下を免れ難い事は明白である。然し他方、ベテラン司書には、行政上のランクとは別に、能力ランクを設けて、給与の面でも仕事の面でも、相応の礼遇を与える事を考えるべきであろう。(教養部教授)

## ——— 会 議

### 図 書 館 商 議 会 専 門 委 員 会

第6回：昭和45年5月27日（水） 第7回：昭和45年6月24日（水）

#### 〔第6回〕 テーマ：部局図書館のあり方について

前回に引きつづき、部局図書館のあり方について検討したが、部局図書館のあり方も、結局は京都大学全体の図書館システムの中でとらえるべきだということから、事務部より、京都大学のライブラリ・システムに関する試案が出され、それについて討議された。

この試案では、京都大学の全図書館を、中央図書館と専門図書館および学習図書館の3つにわけ、専門図書館の機能は、現在の部局図書館が担当するが、ただ現在のままで担当するのではなく、可能なばあいは、専門分野の近いものは、部局のわくを越えてまとめることも必要であることが指摘された。

しかし、部局図書館が専門図書館の機能を受持つというばあいは、中央図書館は具体的にどのような機能を果すべきかが問題となり、次回はさらに、中央図書館の機能を検討することになった。

#### 〔第7回〕 テーマ：中央図書館のあり方について

前回の討論により、中央図書館の果す役割について、さらに詳細に分析された案が、事務部より提出され、それを中心に討論が行なわれた。

前回の案では、中央図書館の役割として、㉔. 事務センター、㉕. 情報センター、㉖. 教養センター、㉗. 保存センターの4つがあげられ、学習図書館の機能が除かれていたが、今回はそれをさらに若干訂正して、㉔. 管理センター、㉕. 情報センター、㉖. 学習・教養センター、㉗. 保存センターの4つの機能を持つとする案が提出された。

ここでとくに論議が集中したのは、中央図書館が学習図書館の機能を持つべきかどうかという点であったが、この問題については、今後さらに検討を続けることになった。

### 大 学 図 書 館 改 革 問 題 懇 談 会

第7回：昭和45年5月8日（金） 第8回：昭和45年5月22日（金）

第9回：昭和45年6月5日（金） 第10回：昭和45年6月19日（金）

#### 〔第7・8回〕 テーマ：学部改革と学部図書室との関係について

主として、学部図書室が、今後の学部改革——大学改革にどのようにかわるのか、現状はどこが不都合なのかということが、各学部よりの報告を中心に話し合われた。多くの学部では、教育と研究の改革が語られる際に、まだ図書館（室）が重要な問題として捉えられていないこと、例えば、学部の改革について比較的早くから討論されてきたといわれる理学部においてさえも、学部学生が三つの系に分けられることが討議されながら、学生の学習にたちまち密接な関係をもつはずの図書室が、その変化にどう応じてゆくのかという点は、十分